

木下順二と中国

——中国側からの評価——

康 小 青

ずっと昔のことだぶん子供のころだろうと思う。いつ、どこで、だれと一緒にテレビを見たのか、すっかり忘れてしまったが、劇名もわからなかったのに、あの場面、子供たちに囲まれて歌っているつうの姿、障子に映っている布を織る鶴の影……いまでも強く記憶に残っている。自分でも不思議だと思う。何か縁があるのであろう。日本に留学し、木下順二の作品を読んで一千回ほど上演された作者の代表作「夕鶴」とわかった。もう一度あの不思議な魅力に感動させられて、いろいろ考えた。

勉強するうちに木下順二と中国の関係についてだんだん関心を持つようになった。彼は三十年くらい前から中国に好意を持って中国のいろいろな分野に関心を持ち、いままで、四度訪中されて、中国についてたくさんの方の文章を書いた。また中国の京劇「除三害」を素材にして新劇を作り、中国の民間叙事詩「阿詩瑪」を素材にして放

送劇を作った。

木下順二のように日中文化交流に大いに貢献した劇作家は珍しいと思つて非常に敬服している。

木下順二は中国、中国演劇についてたくさんの方の文章を書いたが、中国人は木下順二と木下順二の作品についてどう見ているのか、いままでは紹介していないようである。国際文化交流が盛んになっていく今ではぜひ一度紹介する必要があると思う。

この前に、まず木下順二の四度の訪中について調査を報告する。

一回目の訪中

一九五五年四月、アジア諸国会議（ニューデリー）に、六月、世界平和会議（ヘルシンキ）に出席し、その間、インド、エジプト、ヨーロッパ諸国、中国、ソ連、北朝鮮を歴訪し、十月帰国。訪中は夏から秋へのあいだで中国の当時の新聞と雑誌を調べたが木下順二に

関する報道と記事が見つからなかった。

二回目の訪中

一九六〇年九月「夕鶴」を含む訪中日本新劇団の文芸顧問として中国を訪問し、十一月帰国。

日本新劇団の主な活動日程

一九六〇年九月十六日 北京に着く^②

一九六〇年十月九日 北京から武漢へ

一九六〇年十月十六日 武漢から上海へ

一九六〇年十月二十八日 上海から広州へ

一九六〇年十一月七日 広州から帰国

北京での主な上演活動と交流はつぎのとおりである。(地方の上演と交流は北京の新聞にあまり報道されなかった)

九月十七日、中国人民対外友好協会と中国戲劇家協会は北京飯店で歓迎パーティを催した。

九月二十四日日本新劇団の中国公演の初日は民話劇「夕鶴」、シユプレヒコール「安保阻止のたたかひの記録」、「三池炭鉱」、「沖繩」が上演された。陳毅副総理、郭沫若、陳叔通、賽福鼎副委員長(人民代表大会常務委員会委員長) 初日の上演を観賞した。

九月二十六日、周恩来総理は首都劇場で新劇「死海」を観賞した。休憩の時間に、日本新劇団の団長、村山知義、副団長、千田是也、

杉村春子、文芸顧問、木下順二、尾崎宏次、戌井市郎と会見した。

九月二十七日、中国人民代表大会常務委員会副委員長、郭沫若は首都劇場で新劇「女の一生」、シユプレヒコール「安保阻止のたたかひの記録」を観賞した。

十月七日、北京の芸能界と日本新劇団とは新僑飯店で交歓会を催した。

つぎは「中国戲劇報」記者の日本訪中新劇団についての記事を紹介しよう。

「日中兩國戲劇家の戦闘友誼は万古長青」^③

日本新劇団は団長、村山知義をはじめ、副団長、千田是也、滝沢修、山本安英、杉村春子を含めて、全部で七十一名である。日本新劇団は中国人民の中国人民に対する友情をたずさえて、中国人民の熱烈な歓迎を受けた。

日本新劇団は文学座、俳優座、劇団民芸、ぶどうの会、東京芸術座、五つの芸団で結成した新劇団である。団長、副団長はいうまでもなく、日本新劇界の著名人である。ほかにも松尾哲次、岸輝子、木下順二、尾崎宏次、戌井市郎など、日本の有名な劇作家、演出家、俳優ばかりで、ほとんど日本新劇界における芸術造詣が深い、広く知られている芸術家である。

日本新劇団は北京に着くと中国人民の熱烈な歓迎を受けた。彼ら

が汽車を降りると北京文化芸術界は駅で簡単ではあるが、盛大な歓迎式を行なった。この歓迎式に出席した中国側の人々は中国人民対外文化協会副会長丁西林、夏衍、中国戲劇家協会主席田漢、副主席歐陽予倩、梅蘭芳、文化芸術界の有名人、周而夏、許広平（魯迅夫人）、馬彦祥、馬少波、呉雪、陳其通、李伯釗、呂驥、歐陽山尊、任虹、金山及び北京各劇団の俳優、スタッフ全部で三千人ぐらいである。

北京駅から新劇団の宿泊するホテル、新橋飯店までの道路の両側に歓迎の人々はいっぱいであった。

日本新劇は五十四年の歴史（一九〇六年―一九六〇）を持っている。今度の海外初公演の演目は、新劇のほうが、「夕鶴」、「死海」、「女の一生」、シュプレヒコールのほうが、「安保阻止のたたかいの記録」、「三池炭鉱」、「沖繩」である。

日本新劇団は北京に着いた後、中国人民対外友好協会、中国戲劇家協会主催の歓迎パーティ^④に出席した。日本の芸術家たちは北京に滞在中、中央戯曲学院、中国戯曲学院を見学し、中国の新劇「紅色風暴」、「星火燎原」、「万水千山」、「降龍伏虎」、「文成公主」、京劇「楊門女将」、バレエ「白鳥の湖」、昆劇「林冲夜奔」などを観賞した。彼らはまた北京で芸能界の人々と広く接して、六回座談会を催らした。十月七日日本新劇団と北京の芸能界とは盛大な交歓会を催

した。

日本新劇団は九月二十四日、北京の首都劇場で、開幕式をひらき、初日を迎え、北京で合計六回上演を行なった。毎回とも大入り満員となった。日本新劇団は十月九日北京をたつて武漢、上海、広州へ行って上演しつづける。

三回目の訪中

一九六三年七月・八月、訪中作家代表团団長として中国を訪問。

「人民日報」一九六三年六月三十日

中国作家協会の招きで、木下順二を団長役とする日本作家代表团は今日北京に到着した。代表团団員は大原福枝、三宅艶子、城山三郎と佐藤純子で、一行五名である。

「人民日報」一九六三年七月二日

中国作家協会主席茅盾は今晩木下順二を団長とする日本作家代表团を歓迎するために、宴会を催した。中国アジア、アフリカ団結委員会主席廖承志及び北京文化芸術界の有名人、夏衍、老舍、邵荃麟、趙樹理、曹禺、謝冰心、艾芜、嚴文井、陳白尘、楊朔、林林等、この宴会に出席した。

西園寺公一と日中文化交流協会事務局長白土吾夫も宴会に出席した。

宴会の前、茅盾は日本作家代表団のメンバー及び白土吾夫と会見

した。

「人民日報」一九六三年七月四日

周恩来総理は今晚、木下順二を団長とする日本作家代表団のメンバーと会見し、彼らとなごやかに会談した。

「人民日報」一九六三年七月六日

人民代表大会常務委員会委員長、郭沫若は今日木下順二を団長とする日本作家代表団と会見し、彼らとなごやかに会談した。

接見に同席した作家は嚴文井、陳白劍、韓壯屏である。

「人民日報」一九六三年七月十一日

中国人民対外文化協会会長楚図南、中国作家協会主席茅盾は今晚、木下順二を団長とする日本作家代表団を歓迎するためにパーティを催した。

中国文学芸術界連合会主席郭沫若、中国アジア、アフリカ団結委員会主席廖承志及び中国文化界の有名人、作家、夏衍、陽翰笙、張致祥、老舍、邵荃麟、謝冰心、曹禺、趙樹理、嚴文井、陳白劍等もパーティに出席した。

「人民日報」一九六三年七月十二日

木下順二を団長とする日本作家代表団は今日、劇作家陳白劍につきそわれて、飛行機で北京をたつて地方に向かった。

「人民日報」一九六三年七月十七日

木下順二を団長とする日本作家代表団は劇作家陳白劍につきそわれて昨日汽車で西安から上海に着いた。

「人民日報」一九六三年七月二十二日

日本作家代表団は上海に滞在中、文学、演劇、映画界の熱烈な歓迎とあたたかきもてなしを受けた。日本作家は希望する文化芸術界の人と面会した。その中に有名な劇作家、監督、俳優がいるし、青年作家、女性作家、労働者作家もいる。日本作家たちは、別々に、彼らの家庭を訪問して、ひざつきあわせて腹藏のない話をした。日本の作家たちは中国作家の創作、生活、仕事に大きな関心をもってゐる。日本作家代表団は上海に滞在中、魯迅の墓参りをして、魯迅記念館を見学した。また工業展覧会、少年宮を見学し、新劇「ネオンの下の哨兵」、「若い世代」と越劇「争児記」を観賞した。

四回目の訪中

一九八四年十月二十三日から十一月五日まで、木下順二を団長とする日本文化界代表団は中国文化部、中国芸術研究院の招きにより中国を訪問した。代表団一行は北京、ウルムチ、トルファン、南京、上海を訪れ、滞在中中国の文化各界と広く交流し、それぞれの分野で友好を深めた。日本文化界代表団の訪中は、日中文化交流協会と中国芸術研究院との協議に基づいて実施するものである。

中国芸術研究院はどういう研究機関であるか。

中国芸術研究院は、中国文化部の管轄下にあり、一九七八年文化部文学芸術研究院として発足、一九八〇年十一月に中国芸術研究院と改められた。同研究院は、中国および諸外国の文学、芸術の歴史と現状を研究するための機関である。その傘下に、伝統演劇、新劇、音楽、美術、映画、舞踊、「紅樓夢」、外国文芸などの研究所があり、研究員は約五百人を擁している。

つきは中国芸術研究院が行った日本文化界代表団の訪中についての総括報告を紹介する。

総括報告（一部省略）

日本の著名な作家木下順二を団長とする日本文化界代表団一行八名は中国芸術研究院の招きにより、一九八四年十月二十三日から十一月六日まで、北京、ウルムチ、トルファン、南京、上海を訪れた。日本文化界代表団は日本演劇界、舞踊界、新聞界、教育界等の人士で結成した。中国芸術研究院は代表団の具体的な要求によって、細かく、具体的なスケジュールを作った。

北京に滞在中、文化部長助理劉徳有と対外友好協会副会長林林は代表団のメンバーと会見した。中国芸術研究院新劇研究所と中国戯劇家協会は歓迎会を催した。日本文化界代表団は北京人民芸術劇院、中国作家協会、中華書局、中国戯曲学院、放送局を訪れ、万里の長城、明の十三陵、北海公園、故宮博物院、雍和宮などを見物し、東

方歌舞団の歌舞と新劇「紅白喜事」を観賞した。

代表団は新疆に滞在中、ウルムチとトルファンの博物館と新疆民族展覧館を見学し、蘇公塔、麦積提清真寺、阿斯塔那古墓、交河古城、高昌古城と火焰山を見物し、地方歌舞を観賞し、ウイグル族の農民の家をも訪ねた。

代表団は南京に滞在中、南京長江大橋、梅園新村、中山陵、国民党政府の大統領官邸を見物し、江蘇省昆劇院を訪れ、昆劇「朱買臣休妻」を観賞した。

代表団は上海に滞在中、魯迅故居、魯迅墓、内山書店旧跡を見学し、玉佛寺と豫園を見物し、対外友好協会上海分会と上海人民芸術劇院を訪れ、新劇「光緒政変記」を観賞した。

木下順二団長は中国芸術研究院の歓迎宴会でつぎのように語った。「日中両国の文化交流の歴史は非常に長い。私たちは歴史を大切にしなければならぬ。日中友好は政府間の訪問が必要であるけれども、両国文化界の学びあいと友好交流はより一層両国友好の重要な支柱になるだろう。これからの日中文化界の深い、本質的な交流を強めることを希望する。」

木下順二は四度の訪中を通じて日本と中国文化界と芸術界の交流にいろいろの有益な仕事をして大いに貢献した。

一九六〇年の日本新劇団の訪中公演は中国で好評であった。つき

は中国の有名な劇作家、劇評論家の文章の木下順二の「夕鶴」に關する部分を紹介しよう。

中国の有名な劇作家、評論家田漢は「日本新劇団の訪中公演を歓迎する」^⑥という文章で木下順二の「夕鶴」についてつぎのように書いている。

「夕鶴」は訪中公演の幕をあけるレパートリーとして上演されたのである。この劇は木下順二が昔話を素材にして作った劇で彼の名を成す作品である。山本安英は十二年前から彼女のすぐれた演技で、美しい、純真なつうのイメージを作り上げた。惣と運ずはつうと与ひよの幸せな生活を壊そうというたくらみをもっている。つうはこれに対して、非常に憤り恨む。与ひよは突然、冷酷になり、つうへの思いやりを失なってしまった。つうはこれに対して、非常に失望して、わけもわからない。近所の子供たちが彼女を囲んで歌うことさえ、彼女の憂い悩みを発散できない。それにしても、彼女は夫の寝顔を見ると思いきって自分の羽を使って、与ひよの要求に応えようとする。これらの場面では、山本安英の演技は真に迫り、人を感動させる。与ひよの役を演ずる桑山正一氏は利己的な、愚かな農民のイメージを浮き彫りにしたけれども、この若い農民の民衆なりの純粋さを失わせない。与ひよがこの劇において、批判の対象にされるにもかかわらず、利益のみを追求する商人とは違うの

である。彼は最後に「つう……つう……」と叫んで、布をしつかり攪んだまま、空へ飛んでいってしまう鶴を見る。彼は結局、つうの血と涙で織った布を惣と運ずの利益を貪る商品にしなかったのである。

わたしたちは皆、純真な、恩返しにきた鶴に同情する。つうの「お金、お金、どうして、そんなにはほしいのかしら……」というセリフは非常に印象的である。金は私有制度の社会で、どんな役割をしているか。つうはわからないが、ただ単純な愛の幻想を持っている。これこそが彼女の悲劇的結末を招くことになるのである。しかし、つうは子供たちの単純な心を非常に信じている。子供たちは（声をそろえて、うたうように）「おばさん、おばさん、うた唄うてくれ。おばさん、おばさん、遊んでくれ。おばさん、おばさん、うた唄うてくれ。……」子供たちの心暖かい呼び声がつうまでも忘れられない。だから、彼女は人類の未来に希望を持つであらう。（子供たちの役は牛込安子以外、全部北京舞蹈学校の生徒たちで、はやく日本の歌と簡単なセリフをおぼえ、主役の俳優の感情交流もよくできて、たいしたことである。）

また田漢は雑誌「文芸報」で「日本訪中新劇団を歓迎する」を題にする文章に木下順二の「夕鶴」の結末についてつぎのように書いている。

「木下順二は才能豊かな、主に民話を素材にして劇を作る劇作家である。『夕鶴』を観賞した中国の仲間たちは劇の最後に暗い情緒を感じさせられると思うけれども、作者の生活する環境を考えると作者の最後のあつかいは教育的な意義を持っている。」

演劇評論家馬少波は「中国人民の明るい未来を祈る」と題にする文章につきのように語っている。

「夕鶴」は昔話を素材にして作った劇であるけれども、積極的な意義を持っている。この劇は金銭中心の社会の罪を批判する。だれがこの若い夫婦の幸せな生活を壊したのか、どういう原因で単純な与ひようは商人にかわったのか。いうまでもなく、醜悪な貪欲である。作者は自己犠牲精神を持ち、美しい女性のイメージを浮き彫りにした。つうのイメージは貪欲な商人と私利私欲にはしるるひようのイメージと明らかに対照的である。

つうは日本女性の心の美しさを集中的に表現する。つうのイメージは現実にも存在するし、昔の日本人の道徳と理想の化身でもある。つうは与ひようを愛している。自分の羽まで使って布を織る。この自己犠牲は中国の古典劇「白蛇伝」の白素貞が夫の命を救うために、ありとあらゆる困難と危険を経て仙草を盗むことと同じで、大きな人を感動させる力を持っている。この劇のもっとも主題を表したセリフはつぎの段落で引用させてもらおう。

つう^⑤ (はっと気がつく) あの人ね? いまのあの人たちね? そう、

やっぱりそうだ。あの人たちがあんたをだんだん向うへ引っぱって行ってしまう……

与ひよう おい……つう……

つう (うつろに) おかね……おかね……どうしてそんなにほしいのかしら……

与ひよう そら、金があれば、何でもええもんを買うだ。

つう かう? 「かう」ってなに? いいもんってなに? あたしの

ほかに何がほしいの? いや。いや。あたしのほかにはない

んにもほしがつちやいや。おかねもいや。かうのもいや。

あたしだけかわいいがつてくれなきやいや。そしてあん

たとあたしとふたりだけで、いつまでも、いつまでも生

きて行かなきやいや。

……

与ひよう 布を織れ、都さ行くだ、金儲けてくるだ。

つう ひどい人。ひどい人。何てことをいうの? あんたは。

与ひよう 布を織れ。織らんと、おら、出て行ってしまふ。

つう ねえ……ねえ……ねえ…… (与ひよの肩を掴んでゆすぶ

る) ほんと? ……ねえ……あんだ……それ、本気でいう

の??

与ひよう 布を織れ。すぐ織れ。今度は前の二枚分も三枚分も
の金で売ってやるちゅうだ。何百両だでしょう。

つう（叫ぶ）分らない。あんたのいうことがなんにも分らな

い。さきの人たちとおなじだわ。口の動くのが見える
だけ。声が聞えるだけ。けど何をいつてるんだか……

ああ、あんたは、あんたが、とうとうあんたがあの人た

ちの言葉、あたしに分らない世界の言葉を話し出した

……ああ、どうしよう。どうしよう。どうしよう。

以上のセリフは非常に象徴的である。思想矛盾と劇のすじを一步
一步展開させて、最高潮へと向かうのである。

「つう、気がついて何か掛けてやる。——じつと寝顔を見つめて
いる。

つと立って部屋の隅から布の袋を持って来る。——中味を手のひ
らにあける。ざらざらと黄金が床にこぼれる。じつとそれを見つめ
ている。あたりが急速に暗くなって、つうの姿と黄金のみが光の輪
の中に残る。」

ここが劇の最高潮である。そして山本安英の演技の高まりとも言
えるであろう。黄金がざらざらと床にこぼれるとき、観客はつうと
同じように驚き動転するであろう。

郭沫若は「夕鶴」のために詩をつくった。

「夕鶴」

幽玄情默默、温暖意融融。

雪圧羽衣重、口吹炭火紅。

一朝来市儉、拳室変牢籠。

別尋新世界、振翩入雲中。

「幽玄の情は默默、温暖の意は融融。雪は羽衣を圧して重く、口
は炭火を吹いて紅し。一朝市儉（しかい）来れば、室を挙げて牢籠
に变ず。別に新世界を尋ね、翩（はね）を振って雲中に入る。」

中国では、二度、木下順二の作品が翻訳され、出版された。一九
六三年に中国作家出版社から「民話劇」が出版され、一九八〇年に
外国文学出版社から「木下順二戯曲集」が出版された。「木下順二
戯曲集」にも全部民話劇を収めるので、中国に知られている木下順
二の作品は民話劇にとどまっているのである。この事情で、中国の
評論は木下順二の現代劇にふれない。

木下順二および木下順二の作品について、中国人はどう見ている
のか、中国の評論を読んで、まとめたことはつぎの六つである。

①木下順二は独特な性格を持つ劇作家である。木下順二は民話、
伝説に興味を持ち、昔話を素材にして作った作品は多いのである。
彼は下層社会の人を作品の主人公にして、民衆と労働をほめたたえ
て、悪勢力を酷評する。木下順二はその創作活動において、民話劇

に相当な力を注いだ。民話劇は木下順二の戯曲創作の中に重要な地位を占める。彼のすぐれた民話劇の創作によって、木下順二は日本と世界の演劇界において、独自の風格をそなえる劇作家になった。

② 木下順二は一九五五年から何度も中国を訪問したことがある。

中日両国人民の友好と中日両国の文化交流に大いに貢献した。一九五七年作った民話劇「おんによる盛衰記」は中日文化交流の結晶と見られる。

③ 木下順二の民話劇のほとんどの主題は「悪を戒め、善をほめたたえること」であると考えられる。彼の民話劇において、単なる、世のなごみ楽しみ、あるいは民俗、風習を表現する作品は極めて少ない。つまり、昔話、伝説などをそのまま舞台化するだけではないのである。いつも民話劇の創作に深い意味が寓せられて、積極的な意義を持っている。

④ 木下順二の民話劇の、芸術形式における顕著な特徴は、きまつた形式を持っていないことのようにである。形式は自由で、内容と主題によって、さまざまにかわる。例をあげると木下順二の代表作品「夕鶴」は一幕物であるけれども、内容が豊富であるし、時間もながい。全部の筋は夕方、深夜、夜明け、昼、いくつかの段階を分けて、別々に各自の筋を持っている。しかし、セットは一つだけである。事件の経過は全部ここにおいて、すなわち、一切の行動は皆集

中してこのセットの前に展開する。これは戯曲の場面集中の特徴に合致すると同時に、「夕鶴」の内容に要求されていることだと考えられる。

⑤ 木下順二の民話劇のセリフは独特な方言で、通俗的である。戯曲のことは劇において、重要なポイントである。戯曲言語はよく練れて、通俗的、簡單明瞭さが必要であるし、個性に富むことも必要である。木下順二の民話劇のセリフは、こういう特徴を充分持っている。

⑥ 木下順二の民話劇はプロットが簡単で、あきらかで、つねに主題を巡って、一筋のプロットで展開される。プロットの展開はきちんとして、枝葉の問題を派生させない。「夕鶴」はこの点で非常に目立っている。「夕鶴」は多幕物になる可能性が充分にある。「与ひようが鶴を救う」、「鶴がつうに化ける」、「二人が愛しあう」、「結婚」などは独立に展開させることができるけれども、簡単なプロットに豊富な内容を与えることは木下順二の民話劇の特徴の一つである。

注

① 木下順二の四度の訪中のうち、三回が日中国交正常化の前なので、いろいろの事情で中国の新聞や雑誌などに詳しく報道されなかった。集められる限りの資料を整理して、紹介するしかできなかった。

② 直行できなかった。香港経由で北京に着く。

- ③ 「戯劇報」一九六〇年第一八号。
 - ④ 中央戲劇学院、新劇専門の演劇学校。
 - ⑤ 中国戯曲学院、古典劇専門の演劇学校。
 - ⑥ 「人民日報」一九六〇年十月五日。
 - ⑦ 田漢の文章では子供役は北京舞蹈学校の生徒、山本安英の文章では子供役は北京演劇学校の生徒。
 - ⑧ 「光明日報」一九六〇年十月四日。
 - ⑨ 馬少波の引用は中国語で訳して書いてある、ここで原作の文章を引用した。
- 本稿は、本学大学院修士課程を一九八八年三月に終了した時の修士論文の前半の一部である。中国側での資料はまだ日本に紹介されていないので、特に、資料的な部分を選んでもらった。
- 向井 芳樹